

# 序歌「空穂論」

岩 津 資 雄

## 一 還暦の御賀に

還暦の御賀を迎へ 改めて我が思へらく 御歌集『鏡葉』に  
継ぎて『青朽葉』『さざれ水』へといや重ねゆかせるなへに  
『新古今和歌集評釈』『古今和歌集評釈』と 大著の二つ物した  
まひぬ その歌集、短歌の他に ここだくの長歌を交へ 叙事  
に叙情の息吹き醸して 世の常の歌集に非ず 『評釈』は独自の  
鑑賞、犀利の批評に満ちて 訓詁註釈のそれには非ず かく  
しもぞ文芸と古典の学に 新しき道を拓きて この十年歩み来  
ませる 師の君が巨き御足跡を思はざらめや

師の君が五十路を祝ひ申ししは  
きのふと思ふに十年経にける — 歌集『事に触れて』

## 二 『万葉集評釈』第一巻成る

それ自体文芸の作といひつべし  
誰か成しけむ『万葉集評釈』

いりほかの訓詁の学に迷ふもの  
導かすがに『万葉集評釈』

泉居の御足跡もかくや新古今  
古今に継がす『万葉集評釈』

『万葉集評釈』廿幾巻成らむ日を  
いつしかと待たむ御命長く

— 歌集『暗転』

## 三 古稀の御賀に

文芸と学の一致し 間然するところ無き 何人か世にはあり  
けむ うつほのや大人が御業は その芸を学に繋ぎて その学  
を芸に結びて 渾然一体と為します 仰がざらめや

新古今・古今に継ぎて 万葉の歌集きたまふ うつほのや大  
人が御業は 泉居の大人が御跡に ゆくりなく似ては然らず  
御みづから古へ為します 仰がざらめや — 歌集『遠白』

#### 四 挽歌

雑司ヶ谷楓の若葉のしめやかに  
神去りましし君と思はむ

楓の巨木<sup>ナナ</sup>仆れて空のにはかにも  
空虚<sup>うつろ</sup>と見ゆる心といはむ

逍遙の学を歌学の研究に

継がして巨き御一代<sup>みひと</sup>と見む

方法論的に申さば御一代の  
空穂文芸学なりまさに

御講義を措きてはあらず卒業時  
までの六年を聴き通しける

御講義を聴き申さずばこの道を  
選ばざりけむ我かとぞ思ふ

君なくば或ひは捨てて和歌の道  
疎みるにけむ我かとぞ思ふ

卒論の指導を君に受けしより  
専攻の学今にかはらぬ

『楓の木』の四十年の歩み憶ふだに  
君に繋がる思ひの尽きず

又

朝早く空穂の門を叩きしか  
一夜百首の歌持ち寄りて

張行は一度なりしが空穂の判  
あふぎて歌を合はせけること

歌道小見

古歌論に歌論は尽きぬと我が空穂  
そのよろしきを積きて余さず

——歌集『余情』

新古今・古今の歌を見直して  
近代の蒙を啓きける君

——歌集『七十路』

#### 五 『窪田空穂全集』成る

新詩社の掲げし標語 「自我の詩」を和歌に覚めて 新詩社  
を去りける後も その長き歌歴にわたり 超人の作歌力もて  
短歌また長歌を物し 歌集二十三部を重ね 和歌をして「自我  
の詩」たらしめ 和歌文芸近代化への道 打ち拓き歩み来し人  
誰あらぬ窪田空穂と 称へざらめや

無慮一万四千五百首を一巻に  
収めて『空穂全集』成る

超人の作歌意欲とその力量  
凝りてや一万四千五百首の作

全歌集の幾つはあれど定本を  
これと我が見む歌数に校合に

浩翰の『空穂全歌集』おのづから  
座右の書たり机上に在りて

全歌集見つつ改めて思ふなり

「我」「空」「白」の語彙多きこと

「我」の語彙空穂の歌に多きこと  
万葉集もその比にあらじ

述懐の御ころ深し「我」の語彙  
三つ四つと見ゆ三十文字が中に

呟きは呟きのままに調べなし  
ただごと歌のそれにはあらず

呟きは呟きのままに調べなし  
胸に食ひ入る歌を詠ましき

微旨幽韻うたに詠まして万人の  
胸に食ひ入るこの調べはも

## 六 古典和歌集評釈

文芸の研究は即 その価値の批評にありて 批評なき文献の  
学は文芸の学に非ずと 言挙げて学究空穂言ひ出でてより 古  
典和歌研究を始め 新古今・古今・万葉の順もて ねもごろに  
評釈を加へ その全歌七千五百余首に及びて 三大和歌集評釈  
成りぬ これぞ学究空穂が遂げし 最大の業績にして 『空穂  
全歌集』二十三部に積める 歌葉のそれに比すべき双壁と見む  
歌人空穂学究空穂ならではの  
これぞ三大和歌集評釈

## 七 新古今和歌集評釈

空穂の古典和歌集評釈 万葉・古今・新古今と 大著のいづ  
れはあれど その一つ我が選びなば 『新古今和歌集評釈』と  
せむ そは大学の講義に聴きて 後その著書に親しみし故もあ  
らめど 教室に受けし感銘 いや深く残りあるなり 古註『美  
濃』『尾張』の説と 近代の『詳解』の説と 縦横に挙げて批  
判し 新古今歌風之美をば 「艶とあはれ」の具象に見出で  
そを高く評価しまして 稚き日の我らが蒙を いみじくも啓き  
たまへる 新古今和歌集講義 忘れえなくに

新古今歌風の評価啓蒙に

誰ありとせむ空穂を描きて

——歌誌『榎の木』